

佳作

## ボーッと生きてる?!生きてない?!

東京都 目黒学院高等学校一年 多田 明日香

高校一年生現在十五歳の私は、今までどんな感動に出会っているか考えた。日々の暮らしの中で特に感動したことがすぐに思い浮かばない。最近NHKの番組で五歳の女の子が言うセリフ「ボーッと生きてんじゃねーよ」が流行るのが分かる気がする。あまりにも平和に暮らしていて当たり前にならぬ日々が過ぎていて本当にボーッと生きているのかもしれない。

ある本で生まれたことが奇跡で人生は感動の連続と読んだことがある。確かに人間に生まれると感動という感情があるが動物には感動という感情はないと聞いたことがある。感動というのは特別なものなのに私はあまり深く考えずボーッと生活をしているのかもしれない。そこで改めて感動について考えてみた。生まれたことが奇跡で感動の連続なのかを母に聞いてみた。すると母からこんな言葉が返ってきた。

「今までの人生の中で出産が一番奇跡で感動する出来事だったよ。」

と言っていた。それを聞いてもしかしたら私が一番最初に経験した感動は誕生した時かもしれない。

そんな私にも中学一年生の時に挑戦した富士登山の感動を思い出した。運動が苦手な私にはこの挑戦が重かった。その前に登山のトレーニングとして体育の授業で慣れない登山靴を履き坂道を上ったり、公園まで行き、園内を走ったり日々練習で体力のない私は登山に不安を感じながら当日を迎えることになった。当日の天気は晴れ。気持ちよく登山開始。みんなからかなり遅れながらも自分のペースで登れたことに満足しながら一日目を終えた。そして二日目。天気はあいにくの雨、気持ちは憂うつ。頂上に登れるか一気に不安が広がった。いよいよ頂上に向けてチャレンジが始まった。ここでも自分のペースで登るしかないと思いつつ、天気は雨。体力のない私は限界を感じながら一歩ずつ進むしかなかった。その時先生がもうすぐ頂上と言う声に顔を上げると頂上にそびえ立つ鳥居が目に入った。あと少し、あと少しと自分に言い聞かせ、とうとう頂上に立つことが出来た。この時やっと頂上に登ることが出来た!と喜びと感動が一気に沸き上がってきた。疲れた体だったけどやり遂げた感動は今でも忘れられない。そして登山途中で見た朝日の美しさも感動の一つだった。この富士登山の経験は自分との戦いに勝ったような気がした。苦手なことをやり遂げるといって感動と喜びは一生忘れることはない思い出し

なった。

もう一つ私には感動出来る場所がある。それは、新潟県で私の田舎である。毎年夏に帰省しているが新潟県の大自然に感動する。普段私は都会に住んでいて自然とは程遠い生活をしている。毎日見ている景色は高い建物と車と電車の生活。そこから新潟県の大自然に帰るとホッとする。景色は高い山々の緑や田んぼ一面に緑の稲穂が見える。この景色を見ると生命の強さを感じ、感動する。そして空も広い。高い建物などさえぎるものがないからだ。その空の青さや広さにいつも感動する。夏の夜は長岡の上空に大輪の花火を見ることが出来る。夜空に広がる三尺玉の大きさにまた感動することが出来る。この花火の始まりは、昭和二十年八月一日の長岡空襲で亡くなった人々を慰霊するために昭和二十二年に復活して開催日が毎年八月二日、三日に固定されているのは慰霊と平和の意味がこめられているためと聞いたとき私は、今までただ花火を見てキレイだなと思わなかったけど、この由来を聞いてから改めて長岡花火を見るようになったら過去の歴史を感じ、一つ一つの花火に思いがこめられているのが分かり感動するようになった。私にとって新潟県は癒しと感動を与えてくれる大切な場所なのだ。

感動とは普段何気ないこともあるし、苦手なことを克服し、やり遂げる感動もある。そして自然の中に溶け込み、感動することもある。実は日々ボーツと生きている

わけではなく、経験や体験の中で感動しているのである。意識して感動を感じることも、無意識に経験したことを後から感動として思い出すのも素敵なことだと思う。私はこれからもボーツとしながらも沢山の経験や体験をして感動という感情を大切にしていきたいと思う。